

中国の愛国主義教育の有効性への歴史的考察 —1956年の上海鉄道局主催の夏令營を手がかりに—

鄭 成[†]

A Historical Research on the Patriotic Education in China during the 1950s:

Focusing on the Summer Camp Organized by the
Shanghai Railway Administration in 1956

Cheng Zheng

This paper aims to study the effectiveness of the patriotic education in China. It is well-known that the patriotic education have been an essential part of the propaganda campaigns launched by the CCP since 1949. While it is a widely accepted that the patriotic education had great influence on the nationalism in modern Chinese society, it is still not very clear that how the patriotic education influenced people's mind as most of the previous researches focus on the intention of the CCP's patriotic education.

This paper examines the effect of the patriotic education by studying the teachers' own perception of patriotic education and their educational practice during the summer camp as well as the intention of the CCP's cadres who organized the summer camp.

With the examination conducted above, this paper indicates that besides the normal education activities, material incentive implemented during the summer camp is also an important factor which worked as an encouragement to those students.

Key words: patriotic education, 1950s, propaganda campaign

本稿は、1956年に上海鉄道局が開催した夏令營（中国語で「サマーキャンプ」の意）を事例として、建国初期の愛国主義教育を考察し、その実態を把握した上で、その有効性を中心に検討を行うものである。

1. 問題意識と研究対象

近年、中国の愛国主義教育に関する研究が多数現れている。これらの研究の大半は、愛国主義教育の政治的要因に着目した点で共通している。その多くは、中共政権が愛国主義教育を通じて、国民の歴史記憶を調達してナショナリズムを高揚させ、政権の正当性を確保したという観点から考察と分析を行うものである⁽¹⁾。

一方、愛国主義教育の実態に着目した研究は少ない。学校などの教育現場において、愛国主義教育

[†] 早稲田大学社会科学総合学術院

がどのように機能し、人々の考えを変えていたかについては把握されていない。愛国主義教育をめぐっては、政策の主旨のみに焦点が当てられ、実態が十分に把握されていない。愛国主義教育の関連宣伝物を見る限り、空虚な理念に基づくものが多い。それなのに、なぜ、そうしたものが子供の心に根ざすことができたのだろうか⁽²⁾。このような問いが解明されない限り、愛国主義教育についての理解が、政権の正当性を確保する手段であるという次元に止まり、現代中国ナショナリズムの多様な現象についての認識を深めることは難しいだろう。

これまで愛国主義教育の実態に着目した研究が少なかったのは、現場の状況に関する資料が乏しいことと関係がある。多くの先行研究は教科書、新聞記事、映画、公文書などを利用しているが、これらの資料は政策意図や政策の変遷の把握には不可欠であるものの、愛国主義教育の全貌をつかむには十分ではない。

学校の歴史教育、愛国主義教育基地、愛国主義歌曲などを取り上げて、教育現場に一步近づいた汪錚などの先行研究がある⁽³⁾。しかし、汪の研究は資料的制約のため、政策の考察に止まり、教育現場の実態にアプローチした実証研究が足りない。一例を挙げると、各小学校で行われた国旗掲揚式について言及されているが、こうした儀式が具体的にどのように行われ、生徒の精神世界にどのような影響を与えたのかについて、詳しい考察と分析が展開されていない。

上記の問題意識と先行研究の現状に鑑みて、本稿は愛国主義教育の実態を把握する一環として、1950年代の青少年愛国主義教育を取り上げる。具体的には、上海鉄道局が1956年夏に開催した小中学生夏令營（以下「上鉄夏令營」と略）に焦点を当て、当局の開催意図、教育現場の人間の認識、実施手法、教育効果を考察する。1950年代を通じて、夏令營は隠れるカリキュラムとして、正規カリキュラムと同様な教育効果を期待されたため、中国の各地で多数の夏令營が行われていた。その中の大規模な上鉄夏令營を通じて、愛国主義教育の実態を集約的に考察することが可能となるのである。

本稿は主に上海鉄道局工会宣伝部の檔案（檔案とは、中国語ではアーカイブの意味）⁽⁴⁾をメインの資料として使用する。同資料は、二つの部分から構成される。一つは、カバーに「本会の中国少年先鋒隊上海鐵路夏令營開催に関する計画、総括、報告、通知、予算及び首長講話記録」というタイトルが付けられた107ページの資料集である。もう一つは、249ページに及ぶ夏令營入營者の登記表である。

同資料に収録された内容は、以下の通りである。

1. 夏令營の詳細な日程と活動内容
2. 夏令營の準備と実施に関する行政責任者の指示
3. 夏令營準備活動の報告書
4. 入營者の選抜基準と参加する生徒の状況
5. 夏令營実施活動の報告書
6. 夏令營実施効果の報告書

同資料を通じて、教育現場の視角から先行研究で触れられた夏令營の開催意図について理解を深めることができるほか、さらに以下の二つの点について把握することが可能となる。

一つ目は、教育現場を担う人間の愛国主義教育についての認識およびその教育手法である。その内容はさらに二つに分けられる。

1. 教育現場を担う人間が愛国主義教育についてどのように認識していたか。

2. こうした認識を、教育現場を担う人間が教育活動にいかに関与し込んだのか。

二つ目は、夏令營に参加した生徒たちが、愛国主義教育をどのように受け入れたのかということである。より明確に言う、愛国主義教育のどの部分が生徒たちの意識に浸透したのかということである。これに関しては、生徒たちの行動が記録された関連報告や保護者の感想を通じて把握することができる。

2. 1950年代の中国の夏令營

中華人民共和国成立後、夏令營は一つのブームとなった。それは、ソ連の文化的影響によるところが大きい。社会主義大国のソ連では、夏令營は青少年教育の手段の一環として活用されてきた。1945年から1949年までの間だけでも6,000回以上の夏令營が実施され、入營者数は500万人に達した⁽⁵⁾。1950年代、「向ソ一辺倒」の国策下の中国では、教育分野を含むあらゆる分野でソ連をモデルとし、全力をあげてソ連に学ぼうとした。当時のソ連の教育経験を紹介した記事には、夏令營を取り上げるものが多数存在していた。例えば「ソ連政府は、子どもたちの夏期生活を非常に重視する。子どものために多くの市内型の夏令營と郊外型の夏令營を設立した。子どもたちが夏令營で愉快的生活を送る」⁽⁶⁾、「大半の高等教育機関は、南方の黒海、クリミア、バルト海沿岸などの観光地に保養所とスポーツ夏令營を有する」⁽⁷⁾というようなものである。このような夏令營を社会主義教育生活のシンボルとして大々的に宣伝する文言が、教育関係の雑誌誌面に溢れていた。これらの記事が、ソ連労働者の休養施設を社会主義生活のシンボルとして取り上げる記事とあわせて、ソ連の社会主義生活のイメージの確立において重要な役割を果たしている⁽⁸⁾。

記事の宣伝と平行して、ソ連式の夏令營の実践もほぼ同時期より展開されはじめた。早くも1948年8月に、初めてのソ連式の夏令營はソ連軍政下の旅順・大連地区で開催された。夏令營では、若者たちが海辺でソ連の舞踏と楽曲を習得したり、スポーツの試合をしたり、政治と歴史の書物を読み、議論したりして、熱い青春の一コマをともに過ごした。旅順・大連地区の夏令營は、1950年代以降になっても継続的に行われ、最盛期には中国東北全域から参加者が集まり、『民主青年』雑誌によって全国的に知られるようになって、夏令營の普及に先駆的役割を果たしている⁽⁹⁾。

旅順・大連地区の夏令營に続いて、今度は上海をはじめとする一部の大都市で夏令營が実施されるようになった⁽¹⁰⁾。上海では、市レベルの夏令營がはじめて行われたのは1951年のことであり、入營者人数は200名であった。以降、入營者数は年々増加し、開催規模が拡大していった。1956年の市レベルの夏令營は7つあって、それまでの入營者数は通算5,000人以上に達した⁽¹¹⁾。これらの夏令營は個別の学校ではなく、紡績工会、航運工会、医務工会などの市レベルの産業組合が主催、実施した。その背後には、夏令營の運営が多額の宿泊費、食費、交通費、人件費を必要とするため、潤沢な活動経費を持つ産業組合しかできないという経済的な要因があった。

こうした夏令營の中で、1956年7月から8月まで20日間にわたって開催された上鉄夏令營は、200名分の労働者の月給に相当する経費が投入されたほどの、大規模なものであった。上海鉄道局傘下の小中学校から選ばれた241名の参加者が、上海市、江蘇省、浙江省、安徽省、江西省の各地から列車で開催地の杭州に向かったのである。当時、南京から杭州までは鉄道でも一日近くかかるぐらい、移動にお金と時間がかかり⁽¹²⁾、旅行は贅沢なことであった。多くの生徒にとって、杭州への旅

は外国旅行のようなものだったかもしれない。

物不足だった当時、当局がこれだけ多くの資源を投入したのは、何のためであろうか。次節はこの点を中心に考察する。

3. 上鉄夏令営の開催意図

上鉄夏令営の開催意図に関して、開催通知状に明確な文言が記されている。「祖国を愛し、人民を愛し、労働を愛し、科学を愛し、公共財産を愛する、健康かつ活発で、勇敢かつ誠実な新世代を養成すること」⁽¹³⁾と。これは1950年代の「五愛教育」というもので、その核心理念は「愛国」である。「五愛教育」は、1949年9月に制定した「中国人民政治協商会議共同綱領」の第42条を核心理念とし、「祖国を愛し、人民を愛し、労働を愛し、科学を愛し、公共財産を愛する」を訴えている⁽¹⁴⁾。

夏令営の開催前、上海市青年団少年部の段鎮副部長が関係者を対象に行った講話は、青少年教育を統括する責任者の認識を集約的に反映している。段は「子どもの健康を増進し、多様な趣味を培い、祖国と集体を愛する精神を涵養する面で、夏令営は大事な教育的意義を持つ」と語った。講話にある「集体」とは、日本語でいうと共同体に近いニュアンスをもつ言葉であり、「祖国と集体を愛する」というように、しばしば「祖国」と一緒に愛国主義精神の涵養を唱える時に使われる⁽¹⁵⁾。この言葉から、段鎮が愛国主義精神の涵養を夏令営の第一義的目標として立てたことが分かる。

愛国主義教育の実施方法について、段鎮は社会主義制度の優越性の宣伝に焦点を当てている。段は講話の後半で、「この夏令営は、子どもに対する党の愛情が込められたプロジェクトで、社会主義制度の優越性を顕示し、生産力の向上を促進し、子供たちの親の社会主義への情熱を高める契機にもなる」と語った上、「夏令営は子供に褒美を与えるという役割を持つ」と強調した⁽¹⁶⁾。段の講話から、彼を含む多くの行政担当者が、夏令営は子供たちの社会主義に対する感謝の気持ちを育み、愛国主義感情につなげる教育手段だというように位置づけしていたことが窺える。

夏令営生活を通じて、子供たちが社会主義の優越性を確実に体験できるように、段鎮は詳細な指示を出した。指示は主に二種類がある。一つは、経済面と健康面の配慮を強調するものである。例えば、参加者の親に過度な経済的負担を与えないようにするとともに、食品衛生、食事の栄養バランス、医療・保健の面で十分な注意を払うことである。もう一つは、プログラムの充実化を強調することである。子供たちに夏令営生活を楽しんでもらうように、野外キャンプ、観光や見学、運動会など、イベントをたくさん盛り込んで、楽しい夏令営生活が強調整されたのである。

段鎮の講話のポイントは、愛国主義教育と社会主義の優越性の顕示の二点にあるが、前者の愛国主義教育は重要なポイントではあるものの、これをいかに夏令営生活で実施していくかについては、実行性のある指示が見当たらない。一方、後者の社会主義優越性の顕示に関する指示は詳細でかつ実行性が高い。愛国主義教育の実施方法に関する指示が少ないのは、行政側の人間が具体的なイメージを持っていなかったことが考えられる。こうした中で、教育現場の人間はどのような認識をもち、そして日頃の教育実践でそれをいかに貫徹していたのか。次の節でそれを検討する。

4. 現場教育者の教育理念

本稿でいう教育現場の人間とは、上鉄夏令営の運営に携わった小中学校の教員と鉄道局宣伝部の職

員から構成される、上鉄夏令營の関係者を指す。

上鉄夏令營開催に直接に関わったスタッフは全部で69名で、その大半は上海鉄道局傘下の各部署から出向した職員である。その中、上海鉄道局所属の行政幹部、医師、看護師が夏令營の主任、副主任、医療・衛生担当者を、上海鉄道局傘下の小中学校の教員が夏令營の補導員を務めた⁽¹⁷⁾。

本節では、彼らが理想とした学生像とはどのようなものか、どのような子供を育てたいと考えていたのかを中心に彼らの教育理念を把握する。それを踏まえて、夏令營の開催運営に対する彼らの認識と実践方法を考察する。

教育理念の把握については、上海鐵路局が発行する夏令營開催通知状と夏令營参加者の登録表という二つの資料に大きな手がかりがある。

上海鉄道局が発行する夏令營開催通知状には、6項目の選抜基準が優先順位で並べられている⁽¹⁸⁾。

- ① 中国少年先鋒隊員であること。
- ② 勉強がよくできて、健康で、品行方正な「三好学生」であること。
- ③ 年齢は11歳から15歳までとする。
- ④ 小学4年生・5年生、中学1年生・2年生を主な選考範囲とする。小学6年生は、中学受験に支障を来さない場合に限り選考対象としてもよい。
- ⑤ 先進生産者および烈士の子女が、上記の条件を満たした場合は優先される⁽¹⁹⁾。
- ⑥ 校外の自習グループに参加する子どもが、上記の条件を満たした場合は、選考範囲に入れる。

冒頭の①と②項目からわかるように、学生の選抜にあたっては、政治的要素が優先されている。項目①にあった中国少年先鋒隊とは、ソ連のピオネールをモデルに作られた全国規模の少年組織のことである。今日の少年先鋒隊は、6歳から14歳までの生徒のほぼ全員が加入する組織であるが、1955年時点での加入率は26%にとどまり、少年先鋒隊員であることは、それだけ政治的に信頼されていることを意味する⁽²⁰⁾。項目②の「三好学生」とは「徳・智・体（徳育・知育・体育）」の三つがいずれも優秀な生徒を表彰する称号である。一番目の「徳育」は、日頃の品行だけでなく、党と国家に対する忠誠心も含まれる。

もう一つの資料は「入營登記表」である。この「入營登記表」は、夏令營参加者の所属校教員が、夏令營参加者の個人情報（保護者の氏名と職種、成績、体重、身長）と総合評価などの内容を記入し、夏令營の主催側に提出するものである。総合評価は、「品德情況」、「隊部意見」、「学校の意見」の三つの項目から構成される。「品德情況」は参加者の担当教員が、参加者本人の勉強、仕事、日常生活の行いをもとに評価を記入したものであり、「隊部意見」は参加者所属校の少年先鋒隊が下した評価意見で、「学校の意見」は参加者の所属校側が下した評価意見である。評価にはポジティブとマイナス両方の意見があるほか、当該学生に改善してほしい点も書き込まれている。

上海铁路少年先锋队夏令营入营登记表

197

姓名	性别	年龄	生日	原籍	原校	原班	原级							
王	女	12	1962.11.1	上海	上海	上海	五年							
原籍	原校	原班	原级	原籍	原校	原班	原级							
上海	上海	上海	上海	上海	上海	上海	上海							
在队担任的工作	班长 (高岗中队)			在队担任的工作										
入队时间	1962年6月1日 少先队													
各科成绩	语文	算术	历史	地理	自然	体育	音乐	图画	代数	几何	物理	生物	卫生	品德
	4	4	4	4	3	4	4	4						5
品德情况	学习刻苦成绩优良四分以上。严格遵守队章队纪。热爱劳动。热爱集体。热爱家乡。热爱社会主义。热爱共产党。热爱毛主席。热爱社会主义祖国。热爱社会主义祖国。													
健康状况	入营前	出营时	个人	体育方面	学科方面	活动方面								
	身高	145公分	体重	32公斤	爱好	跳绳 排球 午踢								
入营前个人参加的兴趣小组 (可在下列小组中填入第一第二第三等项)														
棋类小组	体育小组		文艺小组		二									
生物小组	美工小组		三											
文艺小组	歌舞小组		一											
队部意见	该生学习态度认真，认真负责，善于动脑，各种活动积极参加，表现优秀。													
学校意见	该生知识面广，上进心强，入营前表现优秀，入营后表现更优。													
辅导员意见	该生知识面广，上进心强，入营前表现优秀，入营后表现更优。													
中队意见	该生知识面广，上进心强，入营前表现优秀，入营后表现更优。													
小队意见	该生知识面广，上进心强，入营前表现优秀，入营后表现更优。													

図 1. ある小学校 5 年生の入营登记表

ある学生の「品德情况」について、担当教員は次のようにまとめている。「勉強はまじめです。各課目の成績は4点以上。小学生の規則を厳守しています。同級生たちに奉仕することに熱心で、いつも穏やかです。親の家を手伝い、弟と妹の世話をよく引き受けます。度胸がなく（あがり症で）、表現能力が低くて、進んで同級生を助けることがまだできていません」と。

「隊部意見」の欄には、「当該生徒は勉強がまじめで、仕事に対して責任感があります。舞踏及び各種の活動に熱心ですが、人と話しをする時はよりきっぱりとした姿勢で臨んでほしい」との意見があった。

「学校意見」の欄には、「当該生徒は入营基準をクリアできたので、入营に同意する」と記入されている。

以下の二つの表は総合評価を整理した結果である。表1はポジティブな評価を、表2はマイナス評価を、該当数の順位に整理したものである。これをもとに、小中学校の教員らがもっとも重視する学生の素質や彼らが理想とする生徒像を浮かび上がらせ、その教育理念について把握したい。

表1. ポジティブな評価の順位表

順位	評価内容	人数	241名の参加者を占める比率
1	勉強が勤勉、または成績が優秀である	206	85%
2	積極的に仕事に取り組み、責任感が強い	158	65%
3	同級生と団結し、友好的に助け合う	122	50%
4	学校のルールをきちんと守る	84	34%
5	教員に丁寧に應對する	56	23%
6	家事をよく手伝う	55	23%
7	積極的に学校活動に取り組む	50	20%
8	楽器、音楽などの特技があり、趣味に積極的に取り組む	39	16%
9	普段は体育運動に励む	28	11%
10	性格が温厚でやさしい	24	10%
11	熱心に労働に取り組む	19	7%
12	同級生への批判を容赦なく行い、強いリーダーシップを発揮	12	5%
12	身なりに気をつかい、清潔感がある	12	5%
13	他人の意見を素直に受け入れる	7	3%

表2. マイナスな評価の順位表

順位	評価内容	人数	241名の参加者を占める比率
1	思い切ってリーダーシップを発揮してほしい	44	18%
2	同級生との繋がりが足りない、団結が弱い	30	12%
3	口数が少なく、あまり発言しない	20	8%
4	せっかちだ	19	7.8%
5	個性が強く、先生や同級生の意見を素直に受け入れない	12	5%
6	規律をきちんと守ってほしい	11	4.5%
7	驕りやすい	7	2.8%
8	仕事に熱心ではない	6	2.4%
8	体を鍛えて、運動を強化してほしい	5	2%
9	積極的に文芸活動に参加してほしい	3	1.2%
10	同級生とけんかすることが多い	3	1.2%
10	勉強の成績が優秀ではない	3	1.2%
12	学校の活動にあまり参加しない	2	0.8%
13	公共財産を大切にしない	1	0.4%

上の二つの表からは、四つの点が読みとれる。一点目は、勉強が大事なことである。勉強がだめな場合は、優等生として認められない。「品德情況」項目に「勉強がまじめです」、または「成績が優秀です」とのポジティブ評価を受けた生徒が全体の84%に達し、二位の「集団活動への参与度、仕事の取り組み」との間に大差をつけている。1955年の雑誌に掲載された文学脚本の中に、成績がよくない生徒が夏令營の選考対象から外されるというものがあった⁽²¹⁾。勉強が重視される傾向は当時では一般的だったことが推測できる。学業重視はどの国においてもよくあることだが、教育を重んじる伝統のある中国社会ならなおさらである。

二点目は、集団活動への参加度が重視されることである。表1にあった二位の「集団活動に積極的に取り組み、責任感が強い」と三位の「同級生と団結し、友好的に助け合う」はこれに当たる。

三点目は、強いリーダーシップが期待されることである。表1で「同級生への批判は容赦なく行えて、強いリーダーシップが発揮できる」とポジティブな評価を受けた生徒は12名いた。それに対して、マイナス評価の一位の「思い切ってリーダーシップを発揮してほしい」と二位の「同級生との繋がりが弱い、団結が弱い」が合わせると73名もあり、全体の30%を占める。このマイナス評価が、教員側の期待を集約的に現している。

表2の中で「口数が少なく、あまり発言しない」という評価もある。これは本来、性格のことであり、リーダーシップと関係するものではないが、参加者のほぼ全員が学生幹部であったことから⁽²²⁾、この評価は生徒のリーダーシップへの期待を現わしたものと捉えてもよいだろう。

四点目は教員の指示に忠実であることが重要視されることである。表2に、4番目の「自己主張が強い」、5番目の「個性が強く、先生や同級生の意見を素直に受け入れない」、7番目の「驕りやすい」の三つがずらりと並んでいる。指示を聞かず自己主張が強い生徒を、教員が敬遠することを示唆している。また表1の四位の「学校の規則をきちんと守る」もこの傾向を示唆している。

以上の四点から、成績がよく、集団活動にも積極的に関わり、教員の指示を忠実に貫徹し、学生同士の間で強いリーダーシップを発揮する、という優等生像が浮かび上がる。強いリーダーシップが求められると同時に、「自己主張が強い」などをマイナス要素としてあげられている。このことを考慮すると、1950年代の中国で学生に求められる強いリーダーシップとは、教員の指示に忠実に従うことを前提したとする、主体性が弱いものであることが分かる。

5. 夏令営の愛国主義教育

5.1 愛国主義教育に関する教員の認識

夏令営の愛国主義教育に関して、行政幹部と教員の認識には大差がなかった。行政幹部は、上海鉄道局工会宣伝部が夏令営の運営全体を仕切ることから、プログラムの位置づけ、課題設定において中心的な役割を果たした。彼らの認識は段鎮の講話を踏襲するものである。行政幹部が開催前に行った二つの講話は、充実した集団活動を通じて、子供の集団を愛する気持ちを育むことを強調し、その具体的な方法として、グループ同士の競争を通じて、子供の帰属意識を高めるといった内容である⁽²³⁾。

行政幹部と比べ、夏令営で愛国主義教育をいかに展開するかについて、教員の方が必ずしも明確なビジョンを持っていたとは限らない。夏令営開催前、教員が二週間の研修を受けることになっていたが、会議記録によると、研修開始当初、各小中学校から派遣された教員とスタッフの間に夏令営の主旨や実施方法について認識が混乱していた。教員らの認識上の混乱には、いくつかの要因があった。一つは、夏令営の運営経験がないことである。それまでの上海で開催された大型夏令営は、年ごとに主催者が変わる。1956年の上鉄夏令営は、上海鉄道局がはじめて主催したものであるため、関係者は全員経験なしのスタッフである。

もう一つの要因は、夏令営に参加した教員はそれぞれの思惑を抱えたまま研修に臨んだことである。教員の中には、杭州に行くことを観光のチャンスと捉える者もいれば、夏休みをプライベートの時間として過ごしたい者もいた。

このような現状に対して、二週間の研修は、行政幹部の講話を学ぶこと、ソ連の夏令営について勉強すること、事務的な準備の三つを中心に展開した⁽²⁴⁾。段鎮ら行政幹部の講話を学ぶことを通じて、教員らは夏令営の開催主旨について、社会主義の優越性を実感してもらうことが大事だという認識を共有できた。

ソ連の夏令営についての勉強は、効果が限定的だったようである。その理由は、ソ連夏令営に関する中国国内の記事はイメージ宣伝の要素が強く、実施面のノウハウについて伝授するような、いわゆるマニュアル的性格のものではないことにある。

夏令営運営の経験をもたない教員が研修期間で集中的に行った作業は、活動プログラムの編成、資料の確保などである。そのかわりに、有効な教育方法が考案されなかった。関係者による報告書では、夏令営実施中、教育方法が柔軟性に欠け、内容も抽象的で、説教に終始し、生徒を叱責することが多かった。また、態度が悪いスタッフがおり、乱暴な指導で生徒のプライドを傷つけたこともあった。このような状況を抱える夏令営では愛国主義教育はどのように展開されたのだろうか。

5.2 夏令営の活動内容

この小節では、夏令営の日常活動を通じて、夏令営における愛国主義教育の実践を考察する。考察対象は日程構成と活動内容の二つである。

上鉄夏令営の日程構成は、以下の通りである。

7月22日	入営者が杭州に到着
7月23日、24日	各中隊編成と学生幹部の選出
7月25日	開営式（昼間は大・中・小隊別の委員会会議、午後は開営式のリハーサル、夜間に開営式）
8月1日	近くに駐屯する解放軍と交歓会を行い、8月1日の建軍節を祝う
8月8日	運動会
8月10日	閉営日

上記の活動は、内容別に以下の四つに分類することができる。

- ・イベント：開営式、建軍節の記念式典、運動会、結営式などがある。
- ・観光・見学：杭州の名所旧跡を観光し、見学する（全部で三回の観光・見学がある）
- ・入営者同士の親睦会：誕生日会、中隊同士の交歓会
- ・日常活動：卓球、水泳などのほか、同好会活動がある。

以下は通常の一日の時間割である⁽²⁵⁾。

5:30～5:35	起床
5:35～5:40	体操
5:40～6:00	身なりを整える、衛生チェック
6:00～6:10	隊旗掲揚式
6:10～6:50	朝食
6:50～7:10	中隊集合
7:10～10:10	中隊または小隊を単位とした集団活動、あるいは同好会活動
10:10～11:20	自由活動または休憩（夏令営内部の有線放送）

11:20～12:00	昼食
12:00～15:00	昼寝
15:00～15:20	間食
15:20～17:00	中隊または小隊を単位とした集団活動、あるいは水泳
17:00～18:30	入浴、休憩、自由活動（洗濯）
18:30～19:10	夕食
19:10～19:30	休憩（夏令営内部の有線放送）
19:30～21:30	交歓会、同好会活動、散歩
21:30～22:00	就寝の準備、トラコーマの予防
22:00	就寝、消灯

日程構成と時間割を通じて、夏令営の活動内容について以下の三点にまとめられる。一つは、集団活動が夏令営活動の主体となっていることである。「楽しい、面白い、充実した活動を以って、規則正しい集団生活を営み、子どもたちが愉快的時間を過ごし、健康を増進できるようにすべきだ」という段鎮の指示の下で、集団活動は解放軍との交歓会、運動会、遠足などのほか、子供たちに歓迎される水泳などを多数取り入れている。これらの集団活動の目的の一つは、参加者同士の一体感と協調性を育むことにあると考えられる。

もう一つは、軍隊のような規則の励行である。夏令営は時間の管理と整理整頓が厳しい。毎日5時半から始まり、就寝時間までの間は分刻みで管理される。自分の肌着は自分で洗い、食堂とトイレの掃除は交代で行う。軍隊なみの規則の励行を通じて、教員らは生徒の規律性を高めようとしたのであろう⁽²⁶⁾。

最後は、健康増進が重視されることである。上鉄夏令営は水泳に行く回数が多く、睡眠時間が長い。230名の水泳同好会のメンバーは4回ほど水泳に行った⁽²⁷⁾。プールが普及していなかった当時、230人が水泳できるだけの場所の確保は容易ではなかった⁽²⁸⁾。それが可能となったのは、この夏令営で存分に水泳を楽しめたという体験をもって社会主義国家の優越性を感じてほしいという主催者側の執念に近いものが大きかっただろう。

また健康増進をはかるため、生徒の睡眠時間確保と食事提供に工夫が重ねられていた。3時間もあつる昼寝と夜の睡眠を合わせると、生徒の睡眠時間は一日で10時間半になる。食事予算は、生徒一人で一日あたり0.8元であった。上海鉄道局の労働者の平均月給が50元であったことから、0.8元は相当な額と言える⁽²⁹⁾。0.8元のうち、0.25元は自己負担だが、家計が厳しい入営者は免除されるという優遇措置があつたため、参加者の三分の一が食事代の全額を免除された。入営者が満足な食事ができるように、夏令営の食事担当のスタッフは、一部の生徒たちが紅米を苦手としていることがわかつた後、すでに購入した数千キロもの紅米を返品して白米に買い換えるなど、食事の提供に気を遣っていたのである⁽³⁰⁾。

上記の三点から見えたのは、夏令営では、充実したプログラム、規則的生活、運動、食事を通じて、子供たちの健康増進をはかっていることである。夏令営の多くの活動内容はこれを大きな目標として立てて展開していたのである。

5.3 夏令營の愛国主義教育

愛国主義教育の具体的手法に関して、上鉄夏令營では、軍隊との交流、生徒同士の互助励行、生徒たちがいかに大事にされているかを教えることなどが行われた。

軍隊との交流は、中共政権成立後に各地で推進された教育手法である。その多くは、各地の小中学校が近くに駐屯する解放軍と交流を行い、勇敢に戦う軍人に接することを通じて生徒の愛国精神を涵養するという形で展開された。例えば、北京師範大学附属女子中学校では、朝鮮戦争に参戦した軍人の英雄的事跡が紹介されたほか、生徒たちは軍人と文通していた。ある日、生徒たちと文通を続けた軍人が戦死した知らせが入り、多くの生徒が泣き崩れて、学校に愛国の熱気が溢れたという⁽³¹⁾。

このような教育手法は上鉄夏令營でも活用された。教員の引率下で、生徒たちは近くの部隊を訪問し、自分たちが書いた手紙と手作りした記念品を部隊の兵士たちに渡した。交流は一日だけの活動で終わったこと、北京師範大学附属女子中学校のようなドラマティックな展開がなかったこと、そして関連記録が少なかったことから、その効果は限定的だったと推測される。

生徒同士の互助励行は一定の効果をあげたように見える。教員側は、生徒同士が助け合うことを奨励し、そのような事例を大々的に宣伝していた。

夏令營の報告書では、次のような事例が教育成果として記録されている。ある男子生徒の服が破れた。そこで、陳という女子生徒がそれを直した。そして、教員が全生徒の前で陳をほめた後、3名の生徒が彼女を見習って同じようなことをしたという。また、ある肌寒い朝、生徒たちが日の出を見に行く。そこで、背の高い生徒が自発的に背の低い生徒を囲んで、強風を防ぐ人間の輪を作った。

党（中国共産党のことは、中国語の宣伝文脈ではいつも「党」と呼ばれる）と国が自分たちをこの上もなく大事にしていることを生徒たちに自覚させるため、関連の教育が随所で行われていた。例えば、夏令營開始直後、各地の生徒たちが夏令營基地となる杭州の安吉路小学校に到着してまもなく、教員が校舎の白い壁や新しい机と椅子を見せて、これらはいずれも皆さんのために党と国が用意したのだよと生徒たちに教えていた。このような教育が積み重ねると、生徒の間に自分たちが選ばれた人間だという意識が次第に高まったのである。

6. 愛国主義教育の受容

夏令營で実施されたこのような愛国主義教育に対して、生徒たちはどのように受容したのだろうか。報告書の関連箇所をもとにその教育効果を分析したい。

事例一：「子どもたちは、共産主義的思想の素養を迅速に身につけた。8月1日、強い雨風に晒されながら二人の子どもが広場に走り出して、夏令營の旗の撤収を強行した」。

事例二：「ある子をご飯を地面に落として困った時には、中隊長と生活委員が素早くそれを拾い、水で洗って食べた。このような行動は、多くの子どもを感動させ、教育的意義が高い」。

事例三：「体が弱い子どもを助けるために、ある子が20日間連続で洗濯をしてあげていた。ある12歳の子は、同じ中隊にいる二人の子どもが切手を買うお金がないことに気付くと、一人に0.5元ずつあげた」などのような事例があげられている⁽³²⁾。

報告書はまた、子供たちの体重が大きく増加したとして、体の成長を夏令營の大きな効果としてあげている。報告書によると、20日間の夏令營生活を経て、入營者の体重は平均で1.29キロ増えてい

る。中には、6.5キロも増加した入営者もいたという⁽³³⁾。

これらの事例は読むにあたって、宣伝的要素を意識する必要があるだろう。例えば、子供同士の間で20日間洗濯をし続けてあげたという事例があるが、そもそも肌着さえ洗えない弱い体質であれば、どうやって水泳もあり、遠足もある20日間の夏令営生活を乗り越えたのか、という問題が残る。

今日の人々にとっては、上記の行動は印象的ではあるが、その必然性を理解するのは難しい。ただの一枚の旗を回収するために、そこまでやる必要があるのかという疑問を抱いてしまう。汚れたご飯を食べることについても、その合理性について同じ疑問を持つだろう。

当時においては、このような事例は賞賛に値する精神を体現したものとして取り挙げられたのである。集団のシンボルとされる夏令営の旗を回収することは、身を挺して集団を守ることになる。ご飯が地面に落ちて汚れたとはいえ、お米は国の財産の一部である以上、抵抗感を克服して食べることは国の財産を守ることになる、という認識が垣間見える。

留意に値するのは、教員と生徒の間に一種の運動関係が形成されたことである。教員は指示を出す。生徒は教員の期待に応えようとして行動する⁽³⁴⁾。一連の教育プロセスの中では、生徒があまり主体性を持たず、受け身となった傾向が見られた。関係者は報告書で、生徒が主体性を持って活動を行う環境が最後まで整わなかったと述べている⁽³⁵⁾。実際には主体性を持たせるという目標が立てられたが、全ての活動日程は教員が決めていたため、実現は難しかっただろう⁽³⁶⁾。

報告の中で、子供の体重増加に関する統計数字は示唆的である。一人あたり1.29キロという数は、10代前半の子供にとって非常に大きい。このペースでは、1年間の体重の増加は21.4キロとなるからである。さらに、6.5キロも増えたケースでは、一日あたり0.325キロ増えた計算になる。誇張したのではないかという疑念は否定できない⁽³⁷⁾。その狙いは、子供たちの体重の増加量を通じて、社会主義の優越性をアピールすることにあると考えてよいだろう。1950年代では、大半の人々は素朴な食生活を送る。そうした中、子供の体重増加は社会主義の優越性をアピールする絶好の材料となるのである⁽³⁸⁾。

夏令営開催のため、上海鉄道局は当初10,074元の予算を立てた⁽³⁹⁾。上海鉄道局労働者の平均月収は50元であったので、200名の労働者の月収に相当する予算額であった⁽⁴⁰⁾。最終の支出額は8,745元となり、そのうち、子供の食事代の助成は3557円で、予算全体の40%を占めた。子供の食事に多額の経費が当てられたのは、段鎮が指示したように、子供たちに「社会主義制度の優越性を理解してもらおう」ためであった。

生徒の出身家庭も興味深い。241名の生徒のうち、一般労働者の子弟は152名、幹部の子弟は係長クラス以下が79名、課長クラスが9名、処長クラスが2名であった。処長クラスの子弟は1%未満である。夏令営参加者の大多数は一般労働者の子弟によって構成されている。このことは社会主義制度の優越性をもっとも体現できた事例として人々に受け止められたのだろう⁽⁴¹⁾。

夏令営終了後、参加した生徒とその親たちから寄せられた49通の感謝の手紙は、夏令営の開催意図が達成されたことを示唆している。ある親は手紙で次のように決意を訴えている。「自分の子どもはいままで遠出の機会に恵まれることがありませんでした。今回は英明な毛主席と党の指導下で、夏令営生活を堪能することができました。今後、私は必ず仕事に一層励み、毛主席と党の深い恩義に報いたいです」と。

社会主義中国の労働大衆が党と国の恩恵を受けている図式がここに成立した。1940年代のソ連において、労働者は国の配慮を受けて、風光明媚な療養地で快適な療養生活を堪能する。新聞記事がそれを取り上げ、社会主義国ソ連の優越性を宣伝していた⁽⁴²⁾。上鉄夏令营は同じような宣伝効果が期待されたのだろう。241名の参加者がそれぞれの学校に戻った後、彼らの夏令营体験は自らの語りを通じて広く知られるようになり、その波及効果がじわじわと発揮されることになる⁽⁴³⁾。

夏令营終了後、「若い世代への党と国の愛情を示す」一環として、夏令营の写真や実物展示会が各地で行われることになったのである⁽⁴⁴⁾。

結論

本稿は、上鉄夏令营の事例を通じて、1950年代に愛国主義教育がいかに展開され、生徒の愛国主義精神がいかに涵養されたかを実証的に考察した。

上海鉄道局は上鉄夏令营を愛国主義教育の場として重視し、そのために大量の人力と経費を投入した。上鉄夏令营の実施にあたって、行政側の指導者が愛国主義教育の主旨を明示するとともに、子供たちに社会主義の優越性を体験してもらうことの重要性を強調した。これをもとに、上鉄夏令营では軍人との交流、生徒同士の互助の奨励、生徒の健康増進という三つの指導手法が実施された。

本稿で考察した限り、夏令营に参加した生徒と軍人の交流の教育効果は限定的であった。教員の指導下で、生徒同士の助け合いの事例が確かに多くなり、生活上の自立性も高まった。しかし、報告書で紹介された愛国主義教育の事例を通じて見えたものは、教員の力強い指導に対する生徒の懸命な反応だけであった。これらの事例は合理性が欠けるため、その持続性については疑問が残る。他方、夏令营は、各学校から選ばれた一握りの優等生が特別の優遇を受けて充実した夏休みを送ったという一面もある。充実した夏令营生活は、彼らへのご褒美でもあった。夏令营生活を通じて、彼らの多くは体重が増え、夏令营開催者が狙った健康増進は大きな成果をあげた。貴重な夏令营体験は社会主義の優越性をアピールすることに貢献したのである。

中国の愛国主義教育の効果を検討する時、前の二つだけが取り上げられることが多かった。しかし、それだけでは、空虚な理念がなぜそれだけの動員力をもったのかという疑問を残す。本稿は、上鉄夏令营についての考察を通じて、限られた物的資源を重点的に投入し、選ばれた一握りの人に社会主義の優越性を体験してもらい、それをもとにさらなる波及効果をはかることが、愛国主義教育の一部であり、大きな動員力の要因の一つであったことを示している。

註

- (1) 代表的研究は以下の二つの研究があげられる。Zheng Wang, "Never Forget National Humiliation: Historical Memory in Chinese Politics and Foreign Relations," Columbia University Press, 2012 (同書の日本語版は『中国の歴史認識はどう作られたのか』東洋経済新報社, 2014年。)江藤名保子『中国ナショナリズムの中の日本—「愛国主義」の変容と歴史認識問題』勁草書房, 2014年。江藤名保子の研究は、考察時期が1970年代に遡り、より長いスパンとなっているが、主に政策面を考察する点で、Zheng Wangの研究と共通している。
- (2) 中国の愛国主義教育について、平野聡と天児慧はこれが反日感情の一因であると論じている。(平野聡『「反日」中国の文明史』(筑摩書房, 2014年, pp. 242-243), 天児慧『日中対立—習近平の中国をよむ』(筑摩書房, 2013年, pp. 76-77)。また、毛里和子の論述に興味深い箇所がある。毛里和子『日中関係—戦後から新時代へ』(岩波書店, 2006年)の「愛国主義教育」の一節では「この愛国主義キャンペーン自体は、現在の日本に対する反対運動ではない。だが、新聞、テレビ、映画以外に、学校教育で日中戦争の「悲劇」を視覚から教え込まれる青少年の対日認識は、当然一定のベクトルをもつこ

どになるし、彼らの日本についての知識はしばしば日中戦争での「日本軍」だけになってしまう」と一定の因果関係を認めている (p. 156)。これに対し、10年後に出版した『日中漂流—グローバル・パワーはどこへ向かう』(岩波書店, 2017年)では、中国の反日感情について「もちろん「愛国主義教育」が影響しているのはいうまでもないが、根底には、改革開放以後の中国社会の多元化状況、自由な空間の拡大がある」と論じ (p. 51)、愛国主義教育の影響を相対化しようになっている。10年を経て愛国主義教育についての捉え方が変化したのである。だが、こうした見解の変化を支えるような実証研究はまだ提示されていない。一方、愛国主義教育が反日感情を引き起こしたのだという主張に対して、その反論は主に中国側によって提起されたものである。こうした反論は、中国国民の「反日」感情の根源は、日本の侵略戦争による暗い歴史記憶にあるとして愛国主義教育の影響に対しては否定的である。総じて言えば、愛国主義教育が中国人の反日感情に与えた影響についての論述はいずれも認識論の次元にとどまり、裏付けとなるような実証研究が少ないことから、愛国主義教育の効果を目に見る形で提示するのはそれだけ難しい。

- (3) 汪錚とは、註2にある Zheng Wang のことである。汪は愛国主義教育の施策について “*Never Forget National Humiliation: Historical Memory in Chinese Politics and Foreign Relations*” に一章を設けて詳しく説明している。
- (4) 同檔案の作成者は、中国鉄路工会上海区委員会宣伝部である。カバーのタイトルは、「本会の中国少年先鋒隊上海鉄路夏令営開催に関する計画、総括、報告、通知、予算及び首長講話記録」となっている。同資料は復旦大学中国社会生活資料センターに収蔵されている。
- (5) 何凱思「蘇聯人在旅順和大連の活動」沈志華、李濱編『脆弱的聯盟—冷戦与中蘇関係』社会科学文献出版社、2010年、p. 43。
- (6) 呂敬先「蘇聯の児童生活和教師生活」、『安徽教育』、1952年3期、p. 5。ソ連の大学生の文化生活を紹介する文章は、夏令営に言及することが多い。
- (7) 付克「蘇聯大学生的文化生活和假期生活」『人民教育』1953年7期、pp. 30~31。
- (8) 鄭成『国共内戦期の中共・ソ連関係—旅順・大連地区を中心に』御茶の水書房、2012年、pp. 204~205。
- (9) 何凱思「蘇聯人在旅順和大連の活動」沈志華、李濱編『脆弱的聯盟—冷戦与中蘇関係』社会科学文献出版社、2010年、pp. 45~49。
- (10) 当時の夏令営の多くは、市レベルの行政機関が主催したものである。教育関係の雑誌は、これを新しい教育形態として多くの紹介記事を出した。例えば、1952年夏の安徽省合肥市では、市の暑期工作委員会の主旨で夏令営が実施された。鳳逸「合肥市少年兒童隊夏令営生活紹介」『安徽教育』1952年1期、p. 32。
- (11) 「団市委少年部副部長段鎮同志講話 (1956年7月11日午前中) 中国鉄路工会上海区委員会宣伝部『本会の中国少年先鋒隊上海鉄路夏令営開催に関する計画、総括、報告、通知、予算及び首長講話記録』(以下『本檔案』とする) p. 62。
- (12) 夏令営終了日の翌日となる8月11日、南京の家に帰る学生は、杭州駅で6時53分発の列車に乗り、10時11分に上海に着いた。上海で南京行きに乗り換えて、18時9分に南京に着いた。12時間の旅であった。「中国少年先鋒隊上海鉄路夏令営活動計画」『本檔案』p. 13。
- (13) 「鉄道部上海鉄路管理局、鉄道部上海鉄路管理局政治部、中国鉄路工会上海区委員会關於举弁少年先鋒隊夏令営的聯合通知」(6月28日)、『本檔案』pp. 51~52。
- (14) 1950年代の「五愛教育」は、1949年9月に制定した「中国人民政治協商会議共同綱領」の第42条を核心理念としたものである。その五愛とは、「祖国を愛し、人民を愛し、労働を愛し、科学を愛し、公共財産を愛する」ということである。何吉賢「新愛国主義」運動与新中国「国際観」的形成『文化縱横』p. 92。
- (15) 何吉賢は、愛国主義と国際主義をセットの用語として使うのが1950年代によく見られる宣伝手法であると論じている。何吉賢「新愛国主義」運動与新中国「国際観」的形成『文化縱横』p. 93。
- (16) 「団市委少年部副部長段鎮同志講話 (1956年7月11日)」『本檔案』pp. 62~63。
- (17) 夏令営の営主任は、上海鉄道局政治部青年部職員の謝菲が担当し、2名の副主任は工会宣伝部職員の靳喬と教育処上海子弟第三小学校の胡恒が担当した。「鉄道部上海鉄路管理局、鉄道部上海鉄路管理局政治部、中国鉄路工会上海区委員会關於举弁少年先鋒隊夏令営的聯合通知」、『本檔案』p. 52。
- (18) 「鉄道部上海鉄路管理局、鉄道部上海鉄路管理局政治部、中国鉄路工会上海区委員会關於举弁少年先鋒隊夏令営的聯合通知」、『本檔案』p. 51。
- (19) 先進生産工作者とは優秀な労働者とのことで、烈士とは革命のために亡くなった人を指す。
- (20) 1955年時点では、少年先鋒隊の入隊適齢期は、9歳から15歳までとしていた。中国共青团団史展覽館公式 HP。http://www.gqt.org.cn/695/gqt_tuanshi/gqt_ghlc/gqtxsd/sxd_ydsh/200704/t20070416_18467.htm
- (21) この脚本のストーリーについて簡単に紹介すると、近づく夏令営にみなが心を躍らせる中、ある入営希望者が成績不良のため入営を諦めざるを得なくなるというものである。この物語では、成績不良で夏令営に入れないことについて、夏令営に入ると勉強する時間がなくなることを理由として挙げている。陳正「從夏令営回来的時候 (夏令営から帰った時)」『劇本』1955年1期、pp. 111~112。
- (22) 241名の入営者の中で、何の職務にもついでない、いわゆる平隊員は6名だけであった。少年先鋒隊の組織体制は通常、一学年を一つの大隊とし、一つのクラスを一つの中隊として編成する場合が多い。中隊長は、クラスの班長に相当し、小隊長は10名前後の隊員を率いる幹部職に当たる。

中国の愛国主義教育の有効性への歴史的考察

- (23) 「夏令营中如何培養兒童集体（営主任領導下少先隊配合在営生活中培養）」『本檔案』 pp. 64~65。
- (24) 「7月13日の準備運営会議記録」。同会議には、青年部石部長、宣伝部蕭部長が参加し、指示を出している。『本檔案』 pp. 68~70。
- (25) 「上海鉄路夏令营経常活動作息時間表（修正稿）」、『本檔案』 p.75。修正案は1956年7月26日より実施した。初案では、6時に起床し、21時30時に就寝して、昼寝時間を2時間と定め、トータルの睡眠時間は10時間半である。
- (26) 軍隊のような集団生活を送り、軍事訓練を受け、それを通じて学生の規律性を高め、愛国主義教育を行うというのが、長きにわたり現代中国の学校教育に存在してきた。1989年の天安門事件以降、中共指導部の指示下で、中国の各大学で新入生を対象とする軍事訓練中心のオリエンテーションプログラムが実施された。2019年現在、中国の多くの大学では、新入生が一カ月前後の軍事訓練を受けることになっている。
- (27) 「興趣小組（同好会）活動統計表」『本檔案』 p. 9。
- (28) 1950年代の杭州のプール施設に関する資料は見当たらないが、上海の状況を比較事例として考えてみたい。上海は長い間、中国のもっとも発達した都市として名を馳せていたが、筆者が小学生時代を過ごした1980年代に一般市民が気軽に使えるプールや体育館は少なかった。家の周辺に市営のプールがないため、夏休み中に子供たちは地元の鋼鉄工場に付属するプールに殺到する。炎天下のプールは水遊びの子供が密集しており、まるで人魚の養殖場のようで、とても思い切った泳げる状態ではなかった。30年近く前の杭州のプール事情は、もっと厳しかったであろう。
- (29) 家庭の経済的事情で食事代の免除を申請する場合、入営登録表に親の収入と家族構成が記入されている。その中、親が40元の月収で一家7人の生計を負担するというケースがよく見かけられる。一方、一人あたりの食事予算を0.8円で計算すると、一カ月の食事代は24元となるので、相当な額と見てもよいだろう。
- (30) 「中国少年先鋒隊上海鉄路夏令营工作総括（1956年8月20日）」『本檔案』 p. 19。
- (31) 1953年頃の北京師範大学女生付属中学校では、愛国主義教育の一環として、少年兒童隊員ら（1953年より少年先鋒隊に改名された。中国のピオネール組織である）が軍人との文通を行う。この文通を通じて、隊員らは日頃の一喜一憂を軍人とシェアし、かわりに軍人が書簡で学生たちを守る決意を表明する。学生と文通を交わす軍人の一人である王敬偉の戦死に接して、多くの学生たちが悲しみを抑えきれず、泣き崩れ、みんなが王氏の遺影の前に復讐することを誓った。また、王敬業が生前に所属した部隊に少年兒童隊の赤いネッカチーフを送り、なるべく多くの「アメリカ鬼」を殲滅するように懇願した。同中学校の総輔導員を務める白耀は、子供らの愛国主義精神が軍事との交流を通じて発揚できたと総括している。白耀「少年兒童隊配合学校進行教育的一点体会」『人民教育』1953年7号、pp. 49~50。
- (32) 「中国少年先鋒隊上海鉄路夏令营工作総括（1956年8月20日）」『本檔案』 pp. 17~18。
- (33) 「中国少年先鋒隊上海鉄路夏令营工作総括（1956年8月20日）」『本檔案』 p. 18。
- (34) 「中国少年先鋒隊上海鉄路夏令营中隊総合性総結（1956年8月20日）」『本檔案』 p. 38。
- (35) それと関連して、報告では、スタッフたちが計画の変更と事務仕事に追われる中、子供の気持ちに配慮しながら体系的な思想工作を展開する精神的余裕が次第になくなり、その結果、共産主義教育が十分ではなかった、と弁解めいた口調で説明するくだりがある。「中国少年先鋒隊上海鉄路夏令营工作総括（1956年8月20日）」『本檔案』 pp. 18~19。
- (36) 輔導員らの総括によると、大隊レベルの活動が多い上、主に指導教員の采配で展開され、子供たちの参加度が低く、指示された通りに動いただけであった。「中国少年先鋒隊上海鉄路夏令营中隊総合性総結（1956年8月20日）」『本檔案』 p. 39。
- (37) 入営登録表に学生の入営前、出営時の体重と身長が記入される箇所がある。その中で、入営前の体重と身長が記入された学生は107名に止まり、入営者の半数に達していない。出営時の体重と身長に関しては全員が未記入である。仮に出営時の体重と身長が別の資料に記入されたとしても、入営前の数字が欠落しているため、全員の体重増加量を割り出すのは難しい。
- (38) 1990年代前半に大学生時代を過ごした筆者の生活体験によると、当時では体重が増えることはイコール健康増進、めでたいことだという捉え方が一般的であった。当時は「最近貫禄がついたね（最近胖了）」というのは、知り合いと久しぶりに会う時によく使う挨拶の言葉だった。1950年代はさらに物が不足していたため、そのような捉え方がより一般的だっただろうと推察される。
- (39) 「労保費追加予算明細表（1956年6月28日）」『本檔案』 pp. 86~87。
- (40) 「入営登記表」によれば、入営する学生の親である労働者の月収は、大抵40元から60元の間である。
- (41) 「中国少年先鋒隊上海鉄路夏令营工作総括（1956年8月20日）」『本檔案』 p. 16。
- (42) このような宣伝はすでに、ソ連軍政下の旅順・大連地区で発行された「実話報」の1946年8月の紙面に現れている。鄭成『国共内戦期の中共・ソ連関係—旅順・大連地区を中心に』御茶の水書房、2012年、p. 205。
- (43) その波及効果は、筆者自身の経験をもとにかなり大きいと推測できる。筆者が中国の大学に在学した1990年代前半、友人が1カ月間の日本短期留学の機会を得た。その1カ月間の日本から帰った後、友人は機会あるごとに日本の大学の行き届いた設備と環境、きれいな市街地のことなど、日本のことをいつも熱っぽく口調で語っていた。そのため、多くの同級生が日本に対して強い憧れの気持ちを持つようになった。
- (44) 「關於夏令营兒童活動圖片及实物巡回展出通知」『本檔案』 p. 60。

（本研究は基盤研究（C）17K03149と早稲田大学2019年度特定研究課題（課題番号2019C-297）の助成を受けたものである。）